

キーワードは「主体性」

文化人類学研究室四〇周年シンポジウム報告

穴 場

理 (30回文化人類学)

文化人類学研究室開設四〇周年記念公開シンポジウム「学問と実社会のつながりを考える」が昨年九月二日、教員や卒業生など六〇人余りが参加して、人文学部講義室で開かれました。前半は四人の卒業生が話題を提供しました。

私と同じ一九八二年卒・一回生の永見幸久君は、学生時代の思い出に触れた中で人類学を「和崎学？」と表現しました。人類学研究室の初代教授・故和崎洋一先生にちなんだものですが、この一言に、一線の研究者の教えにじかに触れることができた、若き私たちの昂ぶりを感じて頂けるでしょう。



な観察者の間を行くのがフィールドワークの醍醐味。畑山さんの自然体は、自身の経験を対象に、フィールドワークが続いているからかもしれません。〇一年卒業の、のしきやかさんは、芸術の世界で活躍中です。絵本作家ののしきさんは、物書きになるためには様々な人々の営みについて知らなければと、人類学を選んだと話されました。

九五年卒業の畑山浩さんは、酒蔵でのフィールドワークが縁で杜氏の道を選ばれました。全国に知られた蔵元で職人の世界に飛び込む決心はいかほどと思いましたが、そんな気負いなど感じさせない話しぶりでした。対象に没入したい思いと冷静

さな姿勢で企画を続けています。シンポ後半、龍谷大農学部末原達郎先生が「人類学は参与観察の時代から、参与した上で動き出す時代になった」とコメントされました。萱岡さんの今後の発信に注目したいと感じました。

話題提供に続いて、先生方からもコメントがありました。初代の助教授・赤阪賢先生は、周囲の協力で生まれたての研究室が学生を迎え、学会を開くことができた振り返り、一方、おわら調査の記録をまとめ、発信することができなかったことが最大の心残りと言われました。

学会参加者の昼食券を私たちが学生が木版刷りで作ったことがありました。予算がない中、仕方のない選択でした。SNSで個人が自由に情報発信できる現在とは、雲泥の差がありました。

末原先生からは「富山大の文化人類学研究室は最高水準」との賛辞をいただきました。「自分でテーマを決める」伝統が守られ、実習や実体験を通じて学生が理論を再構築する力を身につけている、と指摘されました。

現・准教授の野澤豊一先生は「行ったことのない国や人に対するあこがれが感じられなくなってきた」と学生気質の変化に触れ、そうした中で学生の主体性を引き出すため、教員のパーソナリティは重要で、責任は重いと話されました。

シンポと討論の後には懇親会が開かれましたが、振り返るには紙幅が尽きました。若い後輩諸君の「ハカ」に触発され、一回生ほか和崎先生直伝の「桃太郎」をご披露した、とだけご報告しておきましょう。

(富山市在住)

研究室から

社会学

社会文化コース

教授 伊藤 智樹

卒業生の皆さん、お元気ですか。社会学研究室は、一九九三年に富山大学の改組にともない、人文学部人文学科行動文化講座社会学コースとして新設されました。二〇〇六年度からは、「社会文化コース社会学教育研究分野」と呼び方を変えました。現在のスタッフは、佐藤裕教授と、私、伊藤智樹の二名です。



談にのりながら進めていきます。こうした鍛錬を通じて、学生は、それまで経験したことのない規模と構成、論理性を有した文章(卒業論文)を書くことになりま。この経験によって培われる能力は、実務や日常生活において、他の人とコミュニケーションしたり、情報を探索したり、まとめたりする際に、活かされる即戦力となるでしょう。

社会学研究室では、学生自身が社会調査を行うことを重視してきました。一口に社会調査といっても幅広く、アンケートやフィールドワーク、インタビュー、メディア分析、ドキュメント分析などがあります。学生は、自分自身の関心に基づいて調査研究テーマを設定し、それにあった調査方法は何か、実現可能な調査はどのようなものか、その調査によってどのような問いに答えられるか(あるいは、どのような問いに答えられないか)と思うべきでないのか、これらのことを考えるよう求められます。もちろん、簡単なことではないので、二名の教員が伴走し、相

にはあまり関係がないと思われがちです。しかし、ひとたび自分や身近な人が当事者となるとき、あるいは他のきつかけで深い関心をもつとき、情報を収集して整理すること、他の人の意見や主張を理解し評価すること(それは質のよい調査に基づいた見解なのか?)、自分の考えを表現すること、こうしたことが大切になります。卒業生の皆さんが、これからの人生の中で、そのように社会学が活きる経験をしてくれるといいな、と思っています。そして、そのような経験をしたときは、是非我々にも知らせて、励みにさせてください。では皆さん、どうかお元気で!

令和2年度 総会のご案内

日時 令和2年7月4日(土)
 総会 午後1時30分～
 講演 午後2時40分～
 懇親会 午後4時～ (会費5,000円)
 場所 ボルファートとやま
 講演:「旧制富山高等学校と新制富山大学の
 発足をめぐって」
 講師: 富山大学理事・副学長 磯部 祐子
 富山大学人文学部准教授 入江 幸二

講演要旨

富山大学人文学部の前身である旧制富山高専は、1923(大正12)年に開学されましたが、1925(大正14)年の蓮町における校舎完成を経て、1928(昭和3)年10月に開講式が挙行されました。その時の様子は漢文で記された「富山高等學校開校記念碑」(現在人文学部棟前に移設されている)に鮮やかに描かれています。まずは、碑文を読み解きながら、開学の喜び、創設者の思い、時代の精神に思いを馳せたいと思います。(磯部)
 1949(昭和24)年に新制富山大学が発足して70年余りとなりましたが、当初からキャンパスの集中をめぐって議論があり、それは形を変えつつ現在にも影響しているといえるでしょう。次いで旧制富山高等学校をはじめとした前身校のあゆみと新制大学発足前後の経緯を中心に、大学の歴史を振り返ってみたいと思います。(入江)

文化人類学コース 卒業生のみな様へ

文化人類学研究室では、四十周年記念シンポジウムを機に、同窓会を発足し、来たる五十周年を見据えて連絡網の整備をすすめています。

文化人類学コースの卒業生で、四十周年の連絡が届かなかった方は、五頁のシンポジウム報告を執筆した穴場理(八二年卒)

jinuiyoyama@gmail.com

もしくは、同窓会事務局の榎垣まり(九二年卒)

h1ari4mapenzi@yahoo.co.jp

まで、ご一報ください。

活動に際し会費は徴収せず、ご提供いただきました個人情報報告は、同窓会の活動目的以外には使用いたしません。

研究室のホームページに同窓会のコーナーを作っていた手はずになつており、年一度四月ころ発行予定の「ニューズペーパー」を掲載いたします。

詳細はそちらをご覧ください。
 富山大学人文学部文化人類学研究室

(http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/bunjin/index.html)

発起人、渡辺和之(九二年卒)

榎垣まり(九三年卒)

第九回人文の集い

講演

「韓国での映画のような
19年間のストーリー」

講師: 藤本信介

期日: 十月二十四日(土)

午前10時～11時30分

会場: 富山大学文学部一階
第一講義室

概要: 交換留学生として軽い気持ちで韓国に渡ったのが二〇〇一年。それからず

っと韓国生活が続け、夢にまで見た映画の仕事をする

ことができるとは、誰が想像しただろう。

19年間の韓国生活と韓国映画の撮影現場は笑

わずにはいられないハッピーな出来事に溢れてい

ました。海外生活の楽しさと韓国映画の現場の迫

力をお届けします。

終了後、十一時五十分より隣接の第二講義室で昼食会を開き

ます。

講演は参加費無料ですが、昼食会には会費

二千円(学生五百円)です。どちらか一方だけの参加も可能です。

苦しみのなかで知る人と 人とのつながりの大切さ

さて今年も頑張ろうとスタートした令和二年、なんと新型コロナウイルスという思いもかけない敵が前途に立ち塞がり、世界中が不安のなかに日々を過ごしています。天の恵みと人の知恵一体でこの難局を乗り越えたいものです。

さてこうしたウイルス「不安」という噴霧立ち込める日々、相撲「ファン」ならずとも富山県民にとつてなんとも嬉しい話題が、今年三月の大相撲春場所で朝乃山が大関に昇進したこと。朝乃山は県立富山商業高出身であり、愛弟子の快挙を見ることなく他界した恩師の言葉を自らの相撲道の指針として励み、校訓である「愛と正義」の文字が縫い取りされた化粧まわしを嗜みやかにまとった姿は、朝乃山の先輩・同輩・後輩そして応援を惜しまない地域の人々に対する感謝の念の現れであるかと思えます。朝乃山の大関昇進は「人と人とのつながり」から学ぶことの大切さを改めて知らしめてくれたような気がします。

ところで、世界中に猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響は、三月二十四日に予定されていた富山大学の卒業式、及び四月八日の入学式にも及びました。卒業式は、全体の式典は中止となり各学部毎に縮小して行われました。例年行われている同窓会主催の卒業祝賀会もやむを得ず中止といたしました。卒業生の皆さんの思いはいかばかりかと拝察しています。四月八日の入学式も中止となりました。

この紙面でお知らせしている令和元年度総会、第九回人文の集いも中止といたします。同封の「お知らせ」をご覧ください。

富山大学人文学部同窓会
会長 米原 寛

人文学部教員異動

退職(令和二年三月)

○熊谷隆之(日本史)

○竹村 卓(国際関係論)

○澤田 稔(東洋史)

同窓会事務局異動

○新任 村本浩子(令和二年一月)

○退任 島山節子(令和二年三月)

一 訃 報

謹んでご冥福をお祈り致します。

上田 貴広(40回日本史)

奥山 徹(10回国文)

楠瀬 勝(名誉教授 史学)

高岡 幸雄(4回史学)

谷村 正寛(1回英文)

田村 奈緒美(38回文化構造)

徳村 時治(6回史学)

平田 純(名誉教授 英文)

堀田 孝昭(9回英文)

馬瀬 茂(院15回地域文化)

丸谷 利夫(19回史学)

村田 茂(16回国文)

山本 隆(9回英文)

田中 史子 谷口 恵子

成瀬 裕美子 廣瀬 裕一

山田 恵美 山藤 登

山本 孝一 島山 節子

村本 浩子

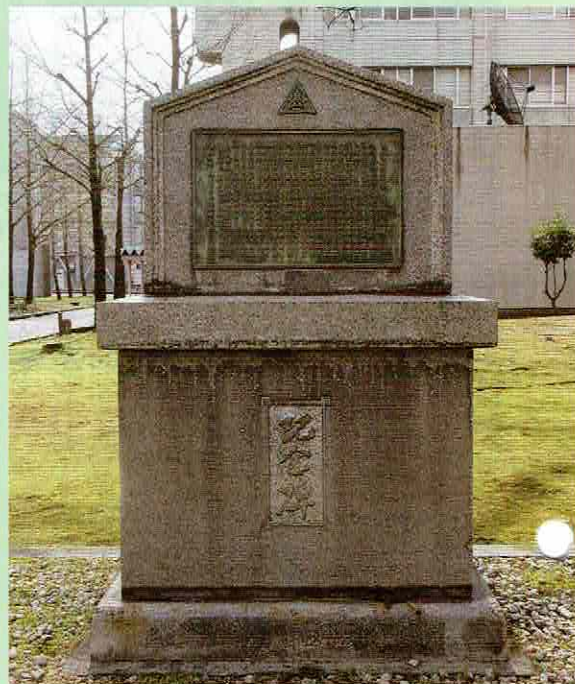
編集委員

題字
大島文雄先生

じんぶん



教養科目「富山大学学」で旧蓮町キャンパスを訪れる学生たち

五福キャンパス人文学部棟前の
「富山高等學校開校記念碑」

総会記念講演

旧制富山高等学校と
新制富山大学の発足をめぐって

磯部 祐子・入江 幸二

富山大学人文学部の前身である旧制富山高等学校は、1923（大正12）年に開学されましたが、1925（大正14）年の蓮町における校舎完成を経て、1928（昭和3）年10月に開講式が挙行されました。その時の様子は漢文で記された「富山高等學校開校記念碑」（現在人文学部棟前に移設されている）に鮮やかに描かれています。まずは、碑文を読み解きながら、開学の喜び、創設者の思い、時代の精神に思いを馳せたいと思います。（磯部）

1949（昭和24）年に新制富山大学が発足して70年余りとなりましたが、当初からキャンパスの集中をめぐって議論があり、それは形を変えつつ現在にも影響しているといえるでしょう。次いで旧制富山高等学校をはじめとした前身校のあゆみと新制大学発足前後の経緯を中心に、大学の歴史を振り返ってみたいと思います。（入江）

富大の教育への感謝と近年の米語

杉森（秋本）典子（29回英文）

追悼 平田純先生 教授 大工原ちなみ

追悼 楠瀬勝先生 同窓会長 米原 寛

第二の故郷 アンナ ドーリナ（22回院・人間学）

研究室から／フランス言語文化 教授 中島淑恵

キーワードは「主体性」

文化人類学研究室40周年シンポジウム報告

穴場 理（30回文化人類学）

研究室から／社会学 教授 伊藤智樹

宇野隆夫先生の古稀をお祝いする会

小田木治太郎（2回院日本・東洋文化）

総会、人文の集い報告、新刊案内

第5回 人文学部の歩み 入江幸二

令和2年度総会、第9回人文の集い開催案内

文化人類学コース同窓会へのお誘い

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6142

E-mail：
alumni1@hmt.u-toyama.ac.jp